

事例紹介…日本のアスベスト患者の結集

夫がアスベスト関連の肺がんで亡くなって（二〇〇一年）以来、古川和子さんはアスベスト患者のための飽くことのない運動のために日本中で知られるようになった。彼女は、医師が初めて夫妻に古川幸雄氏の診断を告げた時に分からなかったアスベストのことを今、知っている。その当時は、夫婦のどちらもアスベストのことを聞いたこともなかったし、アスベストとがんとの関係についても知らなかった。古川さんは次のように述べている。

「私の人生は、夫が死んでから全く変わってしまいました。私は、他のアスベスト被害者を支援するために私の時間の多くを使って日本中を回りました。私の夫は溶接工として働いていた発電所でアスベストに曝露したのです。彼が死んでから、私はアスベストと闘っています。私がアスベストと闘い始めた頃は、私はひとりでした。労災保険を申請しましたが申請が承認されるまでに長い時間がかかりました。様々な困難に直面しました。私が労災を申請していたときに、彼がそのような危険でひどい環境で働いていたことを知るようになりました。彼らは職場で安全指示を受けておらず、さらに彼らは換気システムも防護装備も与えられていませんでした。」

命がアスベストによって脅かされている人々と活動をともにしながら古川さんは、各地の被害者グループやNGO等が国のアスベスト問題をめぐる議論において重要な位置を占めることを認識させるもとなった中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会の創設メンバーに

* 古川和子さんの話：「私はアスベストのことを全く知りませんでした。夫はアスベストの使用は知ってはいました。しかし発病したときに、『アスベストは体に悪いとは聞いたがまさかこのような病気になるとは…』と言っていました」。

** 中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会 <http://www.chuuhishu-family.net/blog/index.shtml>

なった。同会はアスベスト関連疾患についての知識を広めるために、そしてアスベスト疾患の診断がもたらす悲しみ、孤独、そして疎外感と闘う被害者やその家族が情報交換をすることができる場を設けるために、二〇〇四年二月七日に創立された。

同会のメンバーの経験は幅広く、多様である。ある人々は様々な障害を持ちながら数年間病んでおり、ある人は診断後、六か月で死亡している。医療には、手術、化学療法、投薬、民間療法の使用、緩和療法などがある。被害者の平均年齢は三〇代、四〇代と若くなってきている。ほとんどのアスベスト曝露は職業的であるが、非職業的及び環境的曝露のケースも多くなっている。

以下の事例は全て、日本では非常によくある個人的なアスベストの悲劇を描いている。二〇〇四年九月の死の直前に六五歳の加藤徳雄氏は次のように書いた。

「私の悪性胸膜中皮腫が発症してから二年が過ぎました。この病気が進むにつれ、私は多くの苦痛を味わいました。医師が治療法はないと告げた時に、最初は混乱し、後に私の心は空白になりました。多くの眠れぬ夜を過ごしました。すでに倒れているのに、さらに蹴られているようなものでした。

約四〇年前、私はボイラー製造会社で溶接工として働いていました。病気の原因はその頃のアスベスト曝露でした。何も落ち度はないのにこの病気がかかりました。私は治療方法もなくこの病気で死ななくてはならないことを非常に悲しく感じます。診断されるまで中皮腫について何も知りませんでした。ある日、私はテレビで『アスベスト・ホットライン』のことを

* 加藤徳雄さんから宇野林歳さんまでの事例は、2004年世界アスベスト東京会議（GAC2004）の「セッション3 被災者・家族のエンパワーメント」で行われた報告に基づいている。

知りました。そこに電話し、労災補償を申請することが可能であるということを知りました。半年後、ホットラインの方の支援のおかげで労災認定を受けることができました。その通知はきわめて簡単なものですが、それは私に生きる力を与えました。

その時まで、私は抗がん剤を与えられ、繰り返し病院に行っていました。状態が日々悪くなっていくことを体で感じており、できるだけ早く効果のある薬を欲しいと思います。これは患者としての自然な願いです。過去に私はアスベストの危険について知らず、それを吸ってしまいました。しかし今は、私たちはアスベストは発がん物質であることを知っています。私のような被害者はもう出て欲しくない。これがもうひとつの私の望みです。」

(GACC2004の場合) 同会の報告者だった斉藤文利さんは一九七〇年代から家屋、店舗、及び工場で電気工として働いた。彼は数種類のアスベスト板を使用したことが、誰もその危険性について警告するものはいなかったし、防護装備も与えられなかった。斉藤さんは一九九八年に肺がんと診断され、右の肺の切除手術を受けた。切除された肺の中からアスベスト繊維が発見された。温度や湿度が変化すると、咳、呼吸困難、手術傷跡の痛みを感じる。二〇〇二年に医師と看護師により家で問診を受けた後、彼は初めてその症状がアスベスト曝露によるものであるということを知った。東京労働安全衛生センターの支援を得て、彼は労災補償を得ることができた。斉藤さんは同会が、被害者とその家族が彼らの抱える問題と懸念を共有する機会を作り出していることを誇りに思っている。「私はアスベストについて知りませんでした。そして今は、私は国中のアスベスト被害者にアスベストについて、とくにその診断、治療、家族の介護、そして補償について知らせています」と述べた。

* 患者と家族の会の初代代表であった斉藤文利さんは、2007年5月に逝去された。

一九九八年三月二六日、夫をアスベストで失い、未亡人となった大森華恵子さんは生涯の夢と希望を閉ざされた。東京電力の発電所で一八年間働いていた間に大森國男氏は大量のアスベスト物質に接触した。彼の症状に対する最初の診断は肺がんであった。これだけで大変なことであったが、セカンド・オピニオンはもっと悪く、悪性中皮腫であったと大森さんは語った。大森さんの労災申請を当初は拒否した会社も最終的には東京労働安全衛生センターが間に入った後に折れた。大森さんは会社が亡夫の大森氏がアスベストで死んだことについて謝罪しないことについて受け入れることができない。彼女は次のように述べている。

「私と夫は、彼の退職後に日本中を旅行しようと計画していましたが、私たちの夢は実現できないことになりました。私は夫が死んだとは思っていません。彼は会社と政府により殺されたのです。」

（別の）斉藤氏の家族は、入院している彼の病氣は決して回復しないということを知った時に、彼を家に連れ帰った。彼の状態が悪化するにつれて痛みを抑えるためにより多くの痛み止めが必要になった。最後にその痛みがなくなった時に、娘さんとその妹は両親にどのようにしてふたりは出会ったのか訊ねた。「デートにはどこに行ったの?」「私たちが生まれた時どんな気持ちだった?」

「私の父は、妹が私たちを生んでくれたことを感謝した時に嬉しそうに微笑みました。私たちは今までもっとも幸せな時間を過ごしました。」

「私たちは父を奪ったアスベストの使用を決して受け入れることはできません。そして私の父のようなアスベスト被害者をこれ以上出さないようにするために活動を続けます。よ

りよい社会にするための私の父と家族の闘いは今、始まったばかりです。」

同会の世話役の宇野林蔵さんは、東京から南に五〇キロメートルの所にある横須賀市の造船所で三七年間働いた。その間の多くの時間、手でアスベストを除去することを求められた。マスクは一九七八年まで与えられなかった。彼は二〇年間、じん肺症について世の中に知らせるための活動に参加しており、新たな日本のアスベスト被害者の会を創設したメンバーであった。一五年前、じん肺症であると診断された。そのことが彼の人生に与えた影響について次のように述べている。

「私は通常、毎晩四回、咳の発作が起きます。私の咳は非常に短い間隔で起きるので薬を飲み込むことができません。妻は私の背中をさすり、時には救急車を呼んだ方が良いかと聞きますが、私は発作の間は答えることができません。二時間の発作の間、彼女はただ私の様子を見ることしかできず、私は生きていくより死にたい気がします。実際、それは苦痛だけではなく、私の家族の闘いなのです。私が列車に乗っている時に軽い発作が起きると、隣の座席の人が時には他の座席に移っていきます。このことで私は非常に孤独を感じます。」

宇野さんは、日本政府の消極性を残念に思っている。「私の友人は中皮腫や肺がんがんで次々と死んでいきます。そして私もまた肺の中にアスベストの時限爆弾を持っているということ」を片時も忘れることができません。」

吉崎和美さんは、同会が日本でアスベストの問題を知らせていく上で重要な役割を果たしていることに同意する。中皮腫で亡くなった彼女の父は王寺（奈良県）にあるニチアス工場で働いていた。一八九六年以来、この会社は日本で断熱材の製造会社として尊敬

* 吉崎和美さんは、古川和子さんと共に、2006年7月にタイ・バンコクで開催された2006年アジア・アスベスト会議（AAC2006）に参加して自らの体験を発表された。この記事はその報告に基づいている。吉崎忠司さんは日本通運の従業員であったが、ニチアス王寺工場内での作業でアスベストに曝露した。

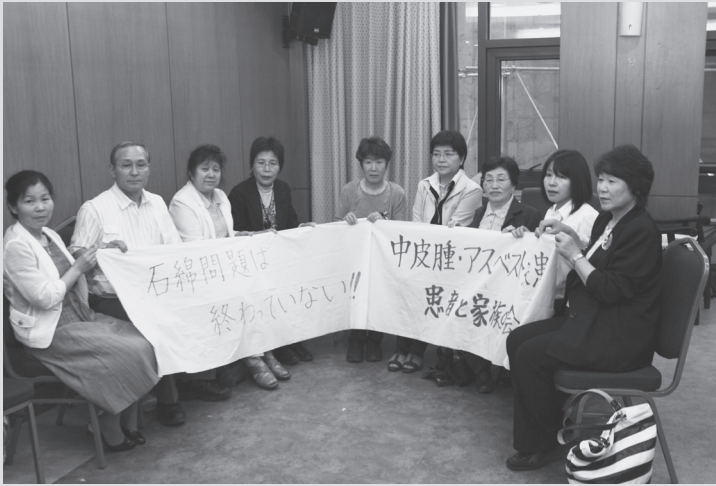
されてきた。しかし残念ながら製品にはアスベストが使われており、吉崎忠司氏のような多くの元従業員が、会社によるそのような危険な物質の不注意な使用の犠牲となってきた。二〇〇六年七月の発表で吉崎さんは、アスベスト会議の参加者らに、父親を愛していたこと、そしてアスベストを憎んでいることを話し、吉崎さんの家族は世界的アスベスト禁止と全てのアスベスト被害者の正義のための運動を続けることを誓った。

今では、日本全国に同会の支部が一〇あり、四〇〇人の会員がいる。同会の代表者らは被害者とその家族に次のような支援を行っている。

- ・ 無料電話相談サービス
- ・ 職業的及び非職業的アスベスト曝露について患者の補償請求の支援
- ・ 被害者、その家族、遺族が相互支援とアドバイスを共有するための機会の提供
- ・ 被害者とその家族の窮状を改善するための立法のための国への働きかけの調整

同会は、病気のために社会から疎外されがちな人々が社会と触れることができるよう春のお花見などの社会的な行事も行っている。二〇〇四年一月、同会は、日本の人々が海外の専門家、被害者代表、被害者、遺族らと直接顔を合わせるすばらしい機会をもたらした世界アスベスト東京会議（GAC2004）の開催に中心的な役割を果たした。それ以来、同会は、多くの支持を得てアスベスト被害者のための基本的な権利の確立、及びアスベストのない社会の創造を求める要求の実現に取り組んできた。要求に注意をひきつけるために、同会は会議や集会を東京で開催した。

その主張に対する逆境を跳ね返しつつ、中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会のメンバーは、アスベストにより命が絶たれようとしている他の人々を支援するために、自分たちの苦痛の経験を語っている。彼らは、アスベスト関連疾病がもたらす恐れに耳を傾け、悲しみを共有し、孤独と疎外を和らげるためにそこにいる。そしてアジアで初めてのアスベスト被害者の国際会議が開催されてから短期間のうちに、日本の無分別なアスベスト使用と闘う長期的な取り組みを政府に立ち上げさせた。



写真：2007年5月18-19日、ソウル大学医学部で開催された「アスベスト問題解決のための日韓共同シンポジウム」は、韓国の中皮腫患者（一番左の方）と日本の患者と家族の会のメンバー（一番右が古川和子さん、その左が吉崎和美さん、左から2番目が中皮腫患者の中村實寛さん）が初めて顔を合わせる場ともなった。日本側の主催団体は石綿対策全国連絡会議。